授業研究会報告

本学では学内でアクティブラーニングなど新たな教育の手法を共有するという観点から、全専任教員を対象とした授業研究会を毎月1回実施しています。研究会では発表者が報告する授業実践の工夫や課題について、教員たちが活発な議論を交わしています。今回は2023年度4月～9月開催の研究会について報告します。

古家 晴美 教授

【略歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科修了、東京家政学院筑波女子大学講師、筑波学院大学准教授・教授
【学位】筑波大学　文学修士
【専門分野】民俗学・文化人類学

■大学教育におけるアクティブラーニング（2023年4月27日開催）

今回の授業研究会では、大学教育におけるアクティブラーニングの方法について発表した。①教材を使用した発見学習、②ブレインストーミング、KJ法、③フィールドワーク、④イベントへの企画立案、⑤外部への発信などが挙げられる。

その中でも、特にフィールドワークは、地域を理解するアクティブラーニングとして有効であると言える。既存の文献資料やデジタル情報以外に、学生独自のテーマを設定し、それに基づいた質問項目を作成するためである。

この際、すでに明らかになっている情報から派生した質問と、新たな関心から生じた質問がある。特に後者に関しては、学生目線を生かしつつも、より具体的な内容に踏み入った質問が出来るような指導を心掛けている。

また、事後のフィードバックについては、内容が独善的なものでないか、どうしてそのように解釈したかについての振り返りを十分に行うよう努めている。

「アクティブラーニングと地域振興」の発表を行う古家 晴美 教授

パンタ ボーラ 准教授

【略歴】:国立天文台専門員、情報通信研究機構技術研究員、東京大学地震研究所学術支援専門職員
【学位】:電気通信大学　修士（工学）
【専門分野】:ネットワーク、ネットワークセキュリティ、データベース、数理モデリング、データサイエンス

■ ICT業界の実務経験から教室まで（2023年6月1日開催）

私は、国立天文台のチリ観測所(ALMA)、情報通信研究機構(NICT)、東京大学地震研究所などを経て、2021年度から筑波学院大学で情報学分野の教員になりました。

情報・技術の進歩、特にインターネットなど通信技術の進捗で人々のライフスタイルが大きく変化してきています。このような背景と変わりゆく社会の中で、教員としては、情報科学を構成する要素を理解し、実生活の中で、或いは研究活動のために情報リテラシーの能力の修得を目指しています。情報に溺れている社会事情の中、学生の問題を解決する能力を引き出し、21世紀を生きるためにICT分野の必要なコンピテンシーを有する人材を輩出するために努めています。

授業では教科書、参考書、講義ノートに書かれた内容をベースにして、様々な業界の実例を挙げながら学生には履修している科目の応用の面も知ってもらいます。小テストやレポート提出の時に技術的な内容のみではなく、表現力、プレゼンテーション力も磨くように指導しています。

荒幡 克己 教授

【略歴】東京大学農学部卒、農林水産省行政官（大臣官房企画室等）、岐阜大学農学部教授
【学位】東京大学　博士（農学）
【専門分野】ミクロ経済学、公共経済学、農業経済学、社会経済史

■ どうする荒幡先生？ 教育方法の模索 アクティブラーニングで悩み、期末テストで悩み、---　未だに迷う毎日（2023年7月27日開催）

私が大学で教えるようになってから、約30年が経過したが、未だに、模索の日々が続いている。以下では、紙幅の制約もあるので、「期末試験等の方法」に絞って論ずる。

試験をやるか、レポートにするかは、それぞれ一長一短があり、また、科目の性格にもよるので、ここでは論点としない。試験をやる前提で考えると、三つの論点がある。

第一に、「持ち込み可か否か」については、社会科学科目が「暗記もの」として間違って理解されていることへの反発から、持ち込み可とし、問題量は比較的多めとしている。

第二に、「中間試験もやるか否か」については、中間試験派である。理由は、テストを採点して返却する際の解説で、理解度が深まり、学習効果が上がる、と期待できるからである。

第三に、「選択式か、記述式か」については、第一の論点との関係で、選択式を採用している。

いずれの論点ともに、それぞれ短所、長所がある。私自身も、今後とも、先輩、後輩の体験に耳を傾けつつ、改善を続けていきたい。

濱西 隆男 教授

【略歴】総務庁、総務省、尚美学園大学
【学位】京都大学法学部卒
【専門分野】行政法・地方自治法・情報法

■良い授業を目指し試行錯誤の日々（2023年8月31日開催）

高校の授業と比較して、大学の授業の変化は非常に大きいように思われる。例えばシラバスの事前提示、講義レジュメの配布・視聴覚機器の活用、成績評価の統一基準・GPAによる全体的な成績評価の目安、学生への授業アンケートの実施等は、以前は行われていなかった。こうした大学の授業の劇的な変化について、高校の授業にようやく追いついたという評価もできよう。しかしながら、高校卒業後の生徒の進路が大きく変わり、就職者が減少した分、大学・専門学校への進学者が増加したことが大きく関係していると考える。その結果として、入学時に学生の基礎学力の引上げ等の対応が求められるようになった。また、卒業時には企業側から学生の質が問われるようになり、4年間の大学教育を通じた学生の質の確保の対応が求められるようになった。こうした課題に直面して、大学教員は、日々の授業での対応を求められることになった。私も、授業目標を学生が専門的知識を習得した上で、自分で考えて一定の解答を提出できることと定め、当該目標を達成できる授業を「良い授業」と設定して、それを目指して試行錯誤を続けている。

中野 千秋 教授

【略歴】東北大学経済学部卒業、慶應義塾大学商学研究科修士課程・博士課程終了、米国ジョージワシントン大学博士課程終了
【学位】経済学士、商学修士、Ph.D.（学術博士）
【専門分野】経営倫理学、組織行動論

■ My Challenge @TGU（2023年9月28日開催）

まず簡単な自己紹介として、中野の経歴や業績の概略を紹介した。次に、現在の担当科目それぞれに関する中野独自の「ティーチング目標」を紹介すると共に、着任（2021年度後期）以降の授業評価アンケート結果一覧を提示し、学生による評価の平均点や学生のコメントについて言及した。

本題の授業運営方法については、特に「経営哲学」という科目を取り上げた。中野はもともと授業で動画を多用することについて批判的であったが、この科目に限っては経営者の生の声を学生により良く届けたいという思いから、あえて動画を多用する授業計画を策定した。この中野のチャレンジの成果について、「ある学生の成長記録」として、当該学生の提出課題（授業感想文）を数点投影し、1学期間の授業の中で、その学生がどのような気づきを得て成長していったかを考察した。中野としては、この動画多用の試みに一定の成果が認められると自負している。

最後に、①授業で動画を多用することについて、②動画等の日本語を十分に理解できない留学生への対応について、授業研究会の参加者に意見を求める形で発表を締め括った。